村町及優計統
視察記
—〔27〕—

名峰筑波により特異な環境に惠まる

遊覽地として活路を開くには

溫い氣持ちで人に接する心掛

ふたり居てさへ
筑波の山に
霧がかゝれば
さびしいもの

と薄倖の詩人横瀨夜雨をして詠嘆させた筑波の町を訪れたのは八月十八日である。快晴とはいかぬまでも兎に角盛夏だといふのに筑波町役場の椅子に腰をおろせば格別暑いといふ感じを抱く程でもなかつた。海拔八百七十五米突といふ頂上から見れば中腹といふべきだらうがそれでも夏は涼しく冬は暖いといはれ昔から柑子蜜柑の名物が土產物にされた程の事でも窺はれる譯である。

筑波の地質

關東の名山筑波の成因に就ては多くの學者が研究もしたし今でも研究を續けて居る向もある程であるが、未だ確實なところ不明である。併し岩石の性質、周圍の地盤との關係から考へると地質學上中世代(今から約二三百萬年前)に地下の岩漿が其の上を覆つて居た古生代の地盤を押上げて大きな山を造つたものであることが推察されるのである。從つて其の當時の筑波山は現在のそれと比較にならぬ大きな山であつたと想像されるのである。其の後地殼の變動によつて日本の大半は海中に陷沒して海底となり筑波山も海中に沈んだのであるが、其の後再び海底が隆起して筑波山も海面に頂上を現はし一つの島を作つたが此の時代は地質學上第三紀と第四紀の間頃で、引續き地盤の隆起と砂礫の沈澱によりて陸地を作り所謂關東平野を形成したが今から二三十萬年も前の事だらうと

の話である。

筑波山の氣象

昔しの事を書き始めると限りがないから筑波山の由來は此の位に止めて筑波山の氣象に就て記さう。筑波山頂の平均溫度は九度二で青森の平均溫度と同じであるが青森に比すれば夏は涼しく炎暑の候でも三十度を越えることは少く、酷寒の折でも氷点下十二度を降ることは稀である。筑波町大字筑波即ち筑波神社拜殿附近の平均溫度は十度九で今迄に計られた中の最高溫度は三十三度三、最低溫度は氷点下八度四であるといふ。氣壓は山に登る程低く其の割合は百米に就て平均八粍六でケーブルカーで上下する時耳が一時遠くなつた樣に感ずることがあるのは鼓膜の內外で氣壓が急に變る爲で山頂の氣壓は平地に比べて約一割低いのである。風は山頂の平均風速は麓よりも二米程速く今まで計られた中で最も强かつたのは明治三十九年九月に襲來した颱風の七十二米一である。併し斯樣に强い風は筑波山上でも恐らく五十年に一度、百年に一度吹くか吹かないで何時でも强い風が吹いて居るのでないのは勿論である。筑波山頂では脚下にだけ雲を見ることが尠くない、一面に低い雲がかゝりその間から周圍の山々が僅かに頭だけ出してゐる雲海の眺めは筑波の一景觀とされて居るが、筑波山頂に霧のかゝぬ日は一年中僅かに百六十日位だといはれてゐる。

祭神と創祀

縣社筑波山神社の祭神は筑波男大神、筑波女大神で男大神と申すは伊弉諾尊、女大神と申すは伊弉冊尊である。創祀の年代は詳かでないが、萬葉集の丹比眞人國人の長歌に「二神の尊き山の並み立の見かほし山と神代より人の言嗣き云々」とあるのによつても上代にある事は明かである。神域は三百五十餘町歩、老杉古松欝蒼として森嚴、社殿は西峯に男大神を東峯に女大神を祀り、延曆元年僧德一が錫を止め山上の神殿を修築し兩部習合の神社として山腹に伽藍を創設し、寛永十年德川家光の寄進によつて山上の西本殿並攝社を建築し、本堂、五重塔、鐘樓、樓門等輪奐の美を極めたものがあつたが明治維新神佛混淆の禁令にあひ堂宇は悉く破却し、明治八年新に拜殿を造營し、現在の拜殿は大正十三年改築されたものである。

祭典と寶物

筑波神社の例大祭は舊曆四月一日御座替祭を執行したので

あるが、それを新暦に移してそのまゝ四月一日に取り行ひ供進使が參向されるのである。三月四日の祈年祭、十二月五日の新嘗祭にも供進使が參向されるが、此の外舊暦四月一日と十一月一日に行はれる春秋二季の御座替祭は臨時大祭を行ひ舊正月十四日には年越祭を行ひ追儺式は同日午前一時に行はれる事になつてゐる。神社の寶物は維新の際大部分失はれ現存するものは四十餘点であるが其の主なるものは後陽成天皇宸翰一幅(德川氏寄進)後水尾天皇宸翰一幅(同上)太刀(德川家光寄進吉宗作國寶)等である。

名所と舊蹟

筑波全山が關東一の名峰として知られてゐるのは今更多言を要しない所であるが御橋は神社正面にあつて德川家光の寄進した總朱塗屋根付の立派なもので常には用ゐず春秋二季の御座替祭に御神輿が渡御することになつてゐる。女体山頂上から僅か下の岩間から清泉が湧出し西南に流れ道を隔てゝ數尋の谷に落ちこゝを「戀が淵」といひ男体から湧出する橘井の水と合して櫻川に流れるのであるが之が陽成天皇の御製「つくはねの峰よりおつる男女川戀そつもりてふちとなりぬる」といふ百一一首中の有名な御歌である。布引瀧はそれから三百米突登りに左に折れ一千米突程行つたところにある。明治維新の頃には男体山頂上から僅か下に五戸の茶屋があつて一を依雲亭、二を迎客亭、三を遊仙亭、四を向月亭、五を放眼亭と稱したので五亭といつたものであるが現に殘つて居るのは依雲亭だけで、この扁額は勤王の士藤田小四郎がこゝに休息した時捨てゝあつた一枚の板に依雲亭と書きそれを自ら彫刻したものである。男体山本殿の背後にある「觀測所」は明治三十四年、山階宮菊麿王殿下が御創立になつたもので設備の完全せる点に於て本邦第一の山岳常設觀測所で明治四十二年中央氣象臺に移管された。地震研究所筑波山支所は東山行人塚にあつて大正九年東京帝國大學が地震觀測及び研究の爲創設したものである。南朝の忠臣楠正勝は虚無僧となり無月と號し世を忍んで古通寺に住し此所で遷化したのであるが庭前にある三重塔はその墳墓である。攝社稲村神社の西にある石門は俗に鬼神返し又は辨慶七戻といつて人に知られ、立身石、大黒石等と共に登山者を喜ばせてゐる。此の外にも名所として擧ぐべきものは多く、動物や植物でも平地に見られないものが相當にあるが餘り長くなるから此の位に止めて視察の本文に入らう。

筑波の産業

筑波町は前にも書いた樣に平地から海拔八百七十餘米突に及ぶ高低の甚だしい土地柄だけに他町村に比して著しい特異性をもつてゐる。眞壁郡紫尾村に接する北部と新治郡小幡村に界する東部とは殆んど山林で田や畑は無く、田井村に面する南部と菅間村と上野村に接する西部に耕地水田が開けてゐるに過ぎない。併し生産物の首位を占めるものは何といつても農産物で昨年の生産額は

△水稻十六萬八千三百九十二圓△陸稻六千九十圓△大麥一千二百三十九圓△小麥八百五圓△大豆二百六十八圓△春繭八千十三圓△秋苗八千十六圓

で其他は酒一萬八十圓、醤油五千七百二十圓、繩八千三十圓木炭五千五百九十二圓、菓子一萬六千六百六十五圓等が主なものであり、筑波町として異色あるものは庭石六千二百五十圓、蜜柑八百七十一圓等があげられ生産總額は三十五萬八千五百七十圓である。

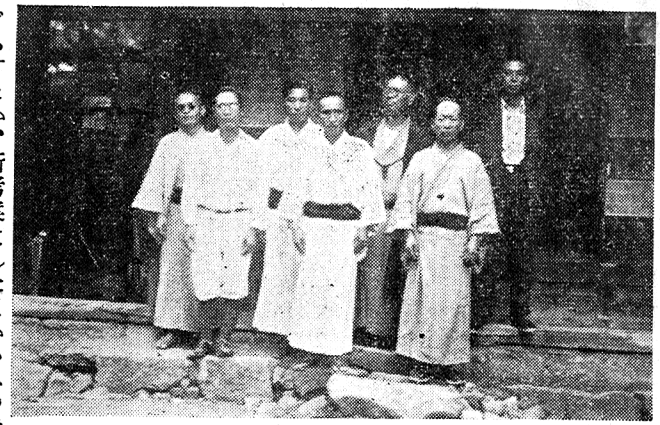
統計調査員

之等の生産調査は勿論統計調査員の手によりて調査集計されるので調査區は九區に分れてゐるが一番廣いのが九區で畑六十三町歩、最低が第四區の田畑二十町歩で、地勢の關係から背面の廣狹を以て調査の難易を論ずる譯にはいかない。殊に二區三區は區域が錯綜して調査が殊の外面倒なのは他の想像以上だとの事である。今調査區並に調査員を列記すれば左の如くである。

調査區	勤續年數	氏名	年齡
第一	十一年	染田一郎	(三三)
第二	七年	梅田長造	(四〇)
第三	十一年	石井增二	(五五)
第四	十一年	渡邊庫太	(五四)
第五	十一年	岡田仁	(四一)
第六	一年	青木豊	(二四)
第七	十一年	竹森精一	(五一)
第八	一年	鈴木英雄	(三〇)
第九	一年	原勝三	(三四)

調査員の手當は以前二十圓宛支給されてゐたが昭和五年から十五圓となり、米生産統計調査手當三圓を合せて現在は十八圓宛を支給されてゐる。同時の豫算は一般豫算二萬三百八十六圓、それに之は特別ではあるが學區豫算といふのがあつて第一學區が六千二百八十四圓、第二學區が六千五百八十二圓、計一萬二千八百六十六圓あるから豫算總額は三萬三千二百五十二圓で、そのうち統計費は六百九十圓を占めてゐるので縣下町村豫算の平均額から見れば統計事務が非常に優遇されてゐる樣に見えるが、之も亦異例に屬する事で筑波町では役場費又は事務費に計上さるべき統計主任給を統計費の中に

含めてあるので他町村に比較し得る樣にする爲主任給を控除すれば統計費は二百三十四圓に過ぎず決して統計事務が他に比し優待されてゐる譯ではないのである。筑波町の學區豫算とか、統計費の豫算額の如きは當然改良修正を要する点といはねばなるまい。統計調査員の打合會は毎年七回位集合し調査上の研究討議を行ふが、筑波の統計事務が他に比し優良だといふのは特に工夫をめぐらすとか、新考案をしたとかいふのではなく、只堅實周到に地味な調査集計を毎年繰返してゐるといふにあるのである。



〔後列右〕役人牧田梅・記書松高・說書澤金・記書原吉
〔前列右〕酒寄酒・役助寄酒・深谷技術員

筑波町役場

筑波町役場は筑波驛から僅か數丁の所にある。登山道路の左側で建物は小さく古く極くお粗末なものである。町長齋藤庄平氏は不在で會へなかつたが役場生活二十年に及ぶ助役酒寄七之助氏が町勢一切の說明をして呉れた。收入役代理梅田長造氏は十六年の勤續者、稅務地籍を掌る書記吉原秀雄氏は更に古く大正十年からの勤續者である。書記酒寄泰氏は昭和四年以來戸籍勸業統計の主任として貢獻するところ多く、筑波町が統計優良町としての成績を擧げつゝあるのも大半の功は酒寄氏に歸すべきであらう。書記金澤幸次郎氏は昭和十三年就任したので一番日が淺いが仕事の量からいへば兵事、稅務、衛生、教育、社會、社寺といふ多方面に亘り、戰時下の重要役割を引受けてゐる。同町から出て名をなした人は前陸大校長飯村穰中將位のもので筑波町として紹介すべきは名峰筑波に一括されてゐるといつても差支はなく、前に同町有志によつて組織された筑波保勝會の關係もあるので筑波山神社々務所を訪れたが社司大原重明伯の代理といふ人が「筑波山の宣傳は一切眞鍋町の筑波鐵道の方で引受けて居りますのでこちらでは判りません」といふ挨拶だ。之には記者も二の句がつげず、遊覽地、名勝地として將來の活路を開かねばならぬ筑波の人達がもつと來遊者に對して溫かい氣持で接する樣に心掛けて欲しいと一言を附記し視察記を終ることにする。

建武の中興に活躍した
楠正家の居城瓜連

模範青年を調査員に任命して
統計事務の向上を圖る

那珂郡瓜連町を訪ねたのは八月十九日であつた。町役場に刺を通じると統計主任平松書記が迎へて色々懇切な說明を試みて呉れ、そのうちに青年村長として瓜連村の刷新に當り遂に昭和九年町制を施行して今日の瓜連をなさせた寺門正大氏が見えて歡談時を久しうした。以下瓜連町を視察した大要を記さう。

位置と沿革

瓜連町は那珂郡の殆んど中央に位し、瓜連、古德、中里の三大字から成つて地形は稍三角形をなし、周圍は三里三十町東は木崎村に、南は茅野村に、西は靜村に、北は上野村に接し、久慈川の流域に屬し水田の大半は岩崎江堰かな灌漑してゐたのであるが大正十二年木崎村と聯合して揚水機を設置して灌漑してゐる。往古建武中興の功臣楠正家が延元元年此の地に據り瓜連城を築いて賊將佐竹義久及び後藤基朝を斬り聲望大いに振つたので名をなした所で、明治三十二年四月一日瓜連、古德、中里、戸崎、鴻ノ巢の五ケ村組合を廢し瓜連村と稱し、昭和九年六月十日に町制施行されて今日に及んでゐるのである。

戸口と生産

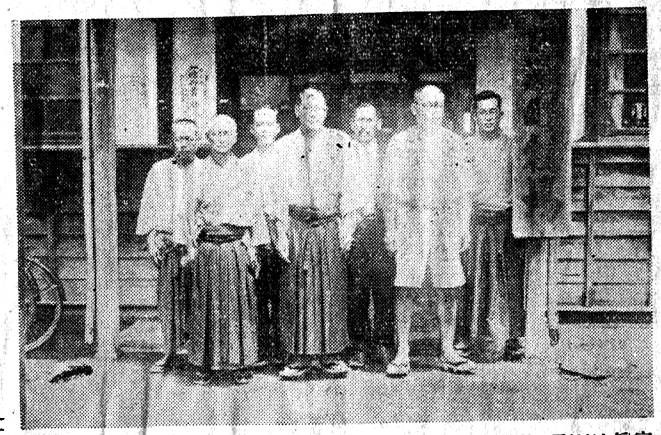
本籍人口は三千九百三十七人であるが現住人口は三千七百五十五人（男一千八百四人、女一千九百五十一人）戸數七百六十九戸である。職業別に見れば農業五百十八戸、水産業十

二戸、工業四十戸、商業百七十五戸、交通業二戸、醫師四戸其他十八戸で、生産物の主なるものを擧げれば

△米十四萬一千八百六十九圓△大麥一萬五千百一圓△小麥三萬一千五百五十圓△稞麥九百七十五圓△大豆三千四十五圓△小豆百九十八金△粟百六十八圓△蕎麥百八十二圓△甘藷一千二百七十六圓△里芋七百十三圓△生大根一千六百六十六圓△胡瓜三百五十六圓△茄子五百九十二圓△葱百三十圓△煙草一萬五千五十四圓△漬菜七百六十圓△製茶一千四百圓△柿一千五百二十七圓△木製品六千二百九十圓△竹製品四百圓△菓子類二千三百五十圓△土瓦一千二百三十圓△染物三百三十圓

等である。

統計調査員



寫眞は町長・龍崎氏・助役・秋山氏・平松氏・收入役・小林氏其他の諸氏

町内の生産統計は八區に區分して調査されるが、その擔任は

區別	勤續年數	氏名	年齢
第一區	三年	萩野谷　清	(三一)
第二區	二年	萩野谷　益	(二八)
第三區	三年	寺門　省三	(三一)
第四區	三年	綿引勝夫	(二七)
第五區	三年	寺門正久	(二八)
第六區	三年	秋山一雄	(三一)
第七區	三年	寺門一德	(二八)
第八區	本年	木内　德	(四四)

で勤續年數が何れも短いのは、統計事務の刷新向上を圖るには調査員に其の人を得なければならぬといふ寺門町長、平松主任の意見から數年來統計調査員の改任が行はれた爲で、勤續年數こそ短いが何れも篤農家、精農家、模範青年といふ顔觸れで第一區の萩野谷清氏は農家經營の研究家として知られてゐるばかりでなく之を實地に應用して家計を挽回し、第四區の綿引勝夫氏は稻作研究家で其の資料につき曾つてAKから放送した事がある程の篤農家である。又六區の秋山一雄氏は水中に學び、第七區の寺門一德氏は水農を卒業した青年であり、第八區の木内德氏は本年就任したばかりであるが、曾つて昭和初年から約十年統計調査員として活躍した事のある經驗家である。

優遇と表彰

同町の豫算二萬六千六百十一圓に對し統計費が四百九十四圓計上されてゐるのを見れば縣下の平均額より多い事が判るであらう。之は有能有爲の人に氣持よく働いて貰ふには出來るだけ優遇方法も講じなければならぬといふ主任や町長の親心からである。從つて手當は二十圓と米生産統計調査費七圓計二十七圓を支給し那珂郡内では最高額を占めてゐる。そればかりでなく事務の改善は他を視察して採長補短刷新を圖らねばならぬといふ見地から毎年統計優良町村の視察を試み、之には町費から旅費の實額支給をしてゐる。尚ほ昨年調査員の表彰規程を制定し、成績のよい者には算盤、萬年筆等を賞與してゐる。調査員に其の人を選任し、其の勞に報ゆるに各種の奬勵方法を講じてゐる瓜連町の統計事務が殊に不振を傳へられる那珂郡は勿論縣下に於ても斷然他を拔いて優良な成績を攻めつゝあるのは決して偶然とのみはいへない。町當局と調査員の協力一致と町民の支援の賜であるといふべきであらう。

事務の統制

統計事務の優良な町村は其の他の事に就てもすぐれてゐるといへる。瓜連町もその一例で町政事務の各ふ方面に就ても常に斯ういふ工夫が振はれて居る。即ち主任を置き且つ副主任を配して萬全を期してゐるのである。寺門町長が事務を總攬し副主任は常に主任を援けて事務の圓滑敏速を期するといふのが眼目で昨年四月から實施されてゐるのであるが其の配置を分擔表として掲げて見やう。

事務種目	職名	主任	副主任
社寺	助役	綿引正治	秋山囑託
學事	同	同	同
土木地理	同	平松書記	
會計	收入役	吉村惣介	龍崎書記
庶務	書記	平松喜一	吉村收入役 龍崎書記
稅務	同		秋山囑託 龍崎書記
統計	同		小林囑託 秋山書記
防護	同		龍崎書記
軍人援護	同		同
戸籍	書記	小林芳太郎	綿引助役
國稅	同		秋山囑託 龍崎書記
兵事	書記	龍崎由之助	綿引助役
文書	同		小林

消防　同　綿引助役
勸業　囑託　秋山丑太郎　平松書記
社會　同　同
衛生　同　龍崎書記

名所と舊蹟

瓜連城趾は前にも書いた樣に楠正家が勤王の大義を唱へて此所に據り佐竹勢と對戰した珂北唯一の城趾で昭和九年史跡として指定されたもので現在常福寺のある所に現在する濠の趾は往時を偲ぶに足りやう。常福寺は淨土宗に屬し草地山蓮華院と號し、延元二年淨土宗第六祖了譽上人の開基、寶德四年二月後花園天皇勅願所の綸旨を賜ひ、天文十三年十月後奈良天皇常福寺の勅額を賜ふ所の名刹、慶長六年關東十八檀林に列せられ、同八年舊水戸藩主の菩提所に定められ、國寶拾遺古德傳を初め多くの什寶を藏してゐる。常福寺が創立された所を白蓮塚と稱し嘉慶二年戊辰の年類燒して現在の所に移るまでこゝに常福寺はあつたのである。此の外永正年間古德民部大輔の居城だつた丁子山古德城の趾が大字古德にある。

銃後の奉公

支那事變發生以來銃後奉公會を組織し先づ豫算九百圓を以つて出征遺家族の援護に當り、毎月十五日を慰問日として町内を十三區に分け區長、方面委員幹部が出征家族をしてゐるが、幸ひなのは戰死者が一名もない事で、戰の搶げは青年團や處女會も總出動で整地耕作から收穫に至るまで萬遺憾ない援護振りを示し、小學兒童には慰問文を作らせて時折發送させてゐる。援護狀況も申分ない狀態で遺家族は至れりつくせりの支援に感激してゐる。

一反歩收穫高並單價

秋季收穫に屬する主要作物の昭和十三年に於ける縣平均の反當收量及單價を示せば次の通りでありますが昨年は未曾有の水害に依り本年との比較は妥當ではないとは思ひますが參考迄に左に掲記致します。

		反當收量	單價
水稻	糯	一、三八八合	三・三一錢
	粳	一、二五八	三・〇七
陸稻	糯	〇、九七二	二・九八
	粳	〇、八七〇	四・五六
ヒエ		一、三八三	一・七二
アワ		一、二九一	一・三五
キビ		〇、八八〇	一・一四
ソバ		〇、八八五	一・一六
ソラマメ		一、一九〇	一・三四
ツナ		一、一五九	一・一五
カブ		一、一四二	一・一七
ニンジン		一、一三一	一・一四
ゴボウ		一、一二一	一・一二
ネギ		一、一二一	一・一二
レンコン		一、一二一	一・一二

（氏は本年就任した　會　一一・德氏は水　ある。）